

外国語だより

Vol. 5

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 5

目次

特集 新しい語学、新しいセンター

特集① 新しい第二外国語、スペイン語をめぐって

チェスとスペイン語と移民研究 - 対談：渡辺先生×山崎先生 渡辺 暁・山崎 太郎 …… 3

特集② ライティングセンター本格稼働

東京工業大学ライティングセンター創立 小泉 勇人 …… 13

コーパスワークショップについて 木村 大輔 …… 20

イベント報告

〈英語スピーチコンテスト (English Speech Contest)〉

18th English Speech Contest Report Kumiko Kiuchi …… 21

Representative Speeches:

Does Eating Organic Food Make Us Healthier? Shiho Otomo …… 22

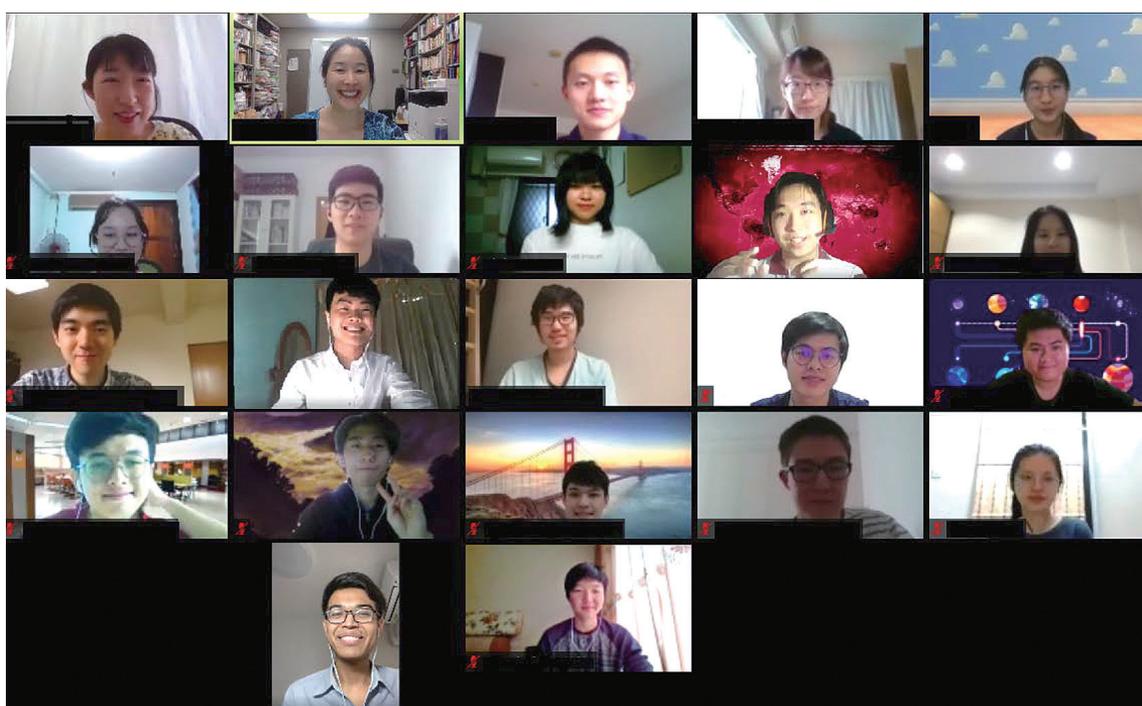
Is Renewable Energy the Future? Erdenebat Battseren …… 23

Are We Equal? Chan Yu Nin …… 24

研究室から

第二外国語としてのスペイン語の開講にあたって：新任教員のごあいさつ 渡辺 暁 …… 26

自己紹介に代えて：多言語コミュニケーションと専門英語教育 木村 大輔 …… 27



English Speech Contest 2020 より

新しい第二外国語、スペイン語をめぐる



渡辺 暁 准教授

チェスとスペイン語と移民研究

対談：渡辺先生×山崎先生 2020/12/4 ZOOMにて

本対談は2020年12月4日に、リベラルアーツ研究教育院外国語セクションに2020年度から第二外国語としてスペイン語が加わったことを記念して、スペイン語専任教員として東工大に着任された渡辺暁准教授をお迎えし、山崎太郎教授を聞き手としてZOOM上で行ったものである。

編集者



山崎 太郎 教授

マトリクス表を丸暗記 — こんなにすごいぞ、東工大生!

山崎：遠隔授業というこれまでにないかたちとなりましたが、渡辺先生が東工大で教え始めて、すでに3クォーターになります。これまで山梨大やほかの非常勤先の大学でも教えていらして、いろいろな学生を見ていると思うんですけど、そのなかで東工大生の印象はいかがでしょう。

渡辺：とても楽しく授業をさせて頂いています。打てば響くという感じの学生がたくさんいて、毎回の授業後のコメントシート（注：第3クォーターより毎回記入してもらっています）を見ても、こういうところが勉強になりましたというのを、かなり細かく書いてくれて、授業をちゃんと聞いてくれている学生が多いという気がします。基本的に頭がよくて、授業に対する要求水準が高いと感じています。

大学院生の授業でも、スペイン語を第二外国語でやってきたという学生がほぼいないにもかかわらず、皆さんすごく理解力もあって、ばりばりと……第3クォーターの途中ぐらいから試しに文章を読んでみたんですが、そういう授業にもちゃんとついてきてくれます。論理的な思考がしっかりしているからこそ、はじめて学んでいる言語でも、辞書さえ引けば、そして文法の知識さえあれば読めるということですね。

山崎：学生のこういう反応にびっくりしたとか、そういうカルチャーショック的な体験ってありますか。

渡辺：びっくりしたのは（東工大ポータルの）マトリクス認証。こんなに面倒くさいもの（すみません）をどうやってるの？とクラスで聞いたら、全部暗記してますという学生がいるんですね。専門の方で頑張っていたり、数字に強いとか、いろんな能力をお持ちでありつつ、スペイン語も楽しく勉強してくれているというのが伝わってきて、ありがたいなと思います。

山崎：そうですね。僕もけっこう学生に驚かされることというのがあって。もうかなり前の話なんですけど、何度もドイツ語を落として留年を繰り返す学生がいたから、研究室に呼んで話したことがあります。「君なんかたぶん頭良いんだろうから、ドイツ語なんか数学と同じで公式を覚えるようにパターンで覚えればぜったい簡単にできるから」と言ったら、「僕、数学の公式って覚えたことがないんですよ」と（笑）。

渡辺：すごい！（笑）

山崎：つまり公式を覚えずに自分の論理的思考と感覚でゼロから解いてしまう、そういう「人種」がいるということ自体に仰天しました（笑）。

渡辺：オンライン授業では試験はしづらいということで、前期はレポート+発音課題にしたんですけども、そのレポートも皆さんすごくよく書いていて。これはもう、本当にすばらしい！よく調べているし、文章もうまいし、しっかりまとめているというので、予定がなかったのに満点をつけたものが何本かありました。

山崎：同感です。第3クォーターで教養卒論のクラスを受け持ちましたが、理系だからこそ論理的に考えられるというか、すごく思考力があって、いい文章を書くな、という学生はけっこう多いですね。

文系教養科目で「オペラへの招待」という授業を持っていますが、そこで学生が書いてくる振り返りシートや期末のレポートを読んでも、専門の文学部の学生が書くものと遜色ないというか、むしろ読みごたえがあって面白い。専門だけでなく、文系の科目も得意で、しかも力を抜かないという学生がかなりの割合で存在します。「立志プロジェクト」をはじめ、2016年から始まった新カリキュラムの効果も大きいと思いますね。グループワークなど、いろいろなかたちで受講者

にタスクを課す科目が増えて、学生にもその意識が浸透していますから。

渡辺：そういえば、第二外国語の教員と一緒に担当していた「外国語への招待」で、こんなことがありました。自分が担当したレポートの中に、文学用語が多く使われているものがあって、どこかからそのまま写してきたんじゃないかと気になった表現もあったので、他の先生方にメールで問い合わせたら、すぐにフランス語の三ツ堀先生から「このぐらいは学生書きますよ」という返事が来て（笑）。

山崎：そう。僕も同じように感じました。つまり、これぐらいの文章、東工大生だったら、わりと当たり前を書くんじゃないかと。

渡辺：疑ってしまって、その学生さんには申し訳ないことをしました。だけど、それが普通であるということに驚いております。

移民研究で培った弱者の視点

山崎：赴任が決定する前の面接で、僕が「大学でリベラルアーツを教えることの意味とは何か？」と質問したときの渡辺先生の答が印象に残っているんです。渡辺先生は面接前にキャンパスのなかを一通り回って、ここの大学は設備もそろってるし、非常に優秀な学生を集めているという印象を受けた。

そのうえで、もし東工大で教える立場になったら、学生に伝えたいのは、「皆さんはとても優秀な方たちだ。ただこの世の中には皆さんのようにはできない人もいっぱいいるということをまずは分かってほしい」ということであり、それこそがリベラルアーツを学ぶことの意味なのではないかとおっしゃった。そのことに僕は大きな感動を受けたんです。

渡辺：覚えていてくださってありがとうございます。あれは実は即興でして、教養教育についてどう考えるかという質問は予想はしていましたが、考えても答が出せないまま、電車が遅れるといけないので、早めに甲府の自宅を出て大岡山に着いたんです。それで面接の場所を確認したあと、キャンパスを歩く時間があって百年記念館のなかの展示を拝見して、「すごい歴史だな」と思うと同時に、「だからこそ、そうじゃない世界というのもあるんだ、世界は、もっといろんな、多様なものでできているんだ。それこそが、私がこの大学で伝えていくべきことではないのだろうか」と、感じたんですね。

私はもともと研究のほうではメキシコの田舎で政治活動をしている人で、メキシコからアメリカへの移民の人たちにインタビューをして、それをレポートにま

とめたり、論文に書いたりということをやってきているわけなんですけど、やはりそういう人たちから本当にたくさん学ぶことってあると思います。

ですので、東工大の皆さんにも、そういう人の話を聞いて、それを謙虚に受け止めて、また自分の学びにつなげていくというようなやり方を伝えていければいいなと思ったわけです。

山崎：なるほど。確かに移民研究というと、弱者の視点が大事になりますね。そこで、ちょっと角度を変えて質問すると、これまでにいろんな移民の方と会ったり、フィールドワークを重ねたりしていったら、そのなかで渡辺先生が感じたカルチャーショックですね、移民の方の反応や暮らしぶり、あ、こういうこともあるのかという驚きというか、目を瞠かれたという体験はおありですか。

渡辺：二つほどお話ししましょう。

一つは2000年代の半ばに、アメリカに留学する機会をいただきまして、イェール大学のあるニューヘイブンという小さな町に二年半いたときのことです。一年経ったあたりから自分の行動範囲もちょっと広がって、近所に車ででかけると、メキシコ人が経営しているメキシコ系のものを置いたスーパーがあったりする。スペイン語で話して、親しくなったのですが、あるとき「日本から来るのにいくらかかった？」と言われたんですね。飛行機代を考えて「千ドル」と言ったんですけども、「本当か？」と。「千ドルで日本から来られるわけないだろう。メキシコから来るのに三千ドル、エクアドルで五千ドルなんだから、日本だったらもっとするんじゃないのか？」というふうに言われて。「あ、そうか」と思ったわけです。

もちろん普通に飛行機で来るなら、メキシコからならたぶん五百ドルぐらいで来られるわけですけども、彼らは正規のパスポートを持って飛行機で来るなんてことはなくて、密入国みたいな形で（国境を）越えてやってくるわけです。そうか、私のようなビザを普通に持っていてというような人は、彼らにとって想像もつかない、といったら変かもしれないですけども、かなり特殊なことなんだな、ということを感じました。

もう一つは一般的な話ですけども、たとえばロサンゼルスで移民の人たちに「ちょっと話を聞きたいんですけど」というふう聞きに行くと、皆さん本当に親切にくださって、でもそういう人たちがビザを持っていなかったりするわけなんですよね。

でもそういう不安定な状況のなかで普通に生活をし、普通にお仕事をされていて、場合によっては移民の団体などでコミュニティ活動もしている。ああいう状況のなかで日常生活を普通に送るって、どれだけの苦勞

があるのか、そのこと自体が本当にすごいなと思ったわけです。

山崎：大統領が今度代わるということで、この傾向は緩和されると思うんですけども、トランプはメキシコとアメリカの間に壁を作るというふうに言って、実際そういう政策を進めていたわけですね。

逆にエクアドルから五千ドルを払ってもアメリカに行きたいという方も大勢いる。渡辺先生がアメリカ人だったとしたら、移民がどんどん流れ込んできていることについて、どのように発言しますか。

渡辺：アメリカという国があれだけ経済的にうまくいっている要因としては、移民を受け入れているということが大きいと思うんですけど。これは移民の話からずれてしまうかもしれないですけども、ここ二十年ぐらいで、アメリカのいろんな大学にチェスのチームができています。選手に選ばれると、奨学金ももらいながら、所属校の看板を背負って団体戦などに出場するという制度ですが、そこではアメリカ人がむしろ少数派で、いろんな国からすでにグランドマスターのタイトルを持つ人たちがアプラインしてきてたりするんです。当然、その人たちを受け入れる大学は強くなりますよね。これはかなり特殊な例ではあるんですけども、そういうふうに外国人を受け入れてゆくことで、アメリカ合衆国という国がいろんな意味で伸びているというか、そういう要素は絶対あると思うんですけど。

もう一つ例を挙げますと、私も授業で使ったりするディズニーの映画で『リメンバーミー（原題：Coco）』というのがあります。メキシコを舞台に、メキシコの死者の日というお祭りをベースにした映画なんですけども、そういう作品が、しかもあれだけの完成度の高いものができるということ自体、メキシコとアメリカが切っても切れない深い関係にあるということの証明だと思います。

もちろん国境の状況はいろいろ大変ですし、そのときどきの経済状態に左右されることも多いでしょう。リーマンショックでアメリカが不景気に陥ったときなど、「もうアメリカに行ってもどうせ仕事がないから」といって、メキシコからの移民の流れがストップしたり、逆に、「景気がよくなるまで、なんとかお前らもちこたえろ」というのでメキシコからアメリカの家族に送金をするなんていう話も報道されたりしていました。

いずれにせよ、私がアメリカ人なら、今のアメリカがあるのは、移民の人たちにも多くを負っているということ、もうちょっと認識しましょうよ、というようなことを呼びかけるだろうと思いますね。もちろんそれで納得しない人もたくさんいるから、トランプ大統領は前の選挙に勝ったわけだし、今回もかなりの人

が投票したのだとは思いますが、自分の主張が受け入れられるかどうかは別にして、そんなことを考えたりしています。

チェスと出会って、開けた世界

山崎：渡辺先生のなかで、スペイン語と移民研究とチェスが、三角形のそれぞれの角をなして、三つがいろんな形でつながっているんだなという認識を新たにしました。そこで一つお聞きしたいのは、チェスとの一番最初の出会いですね。のめり込んでいきっかけになったことって何かありますか。

渡辺：もともと中学・高校の頃、将棋が好きでやっていたのですが、チェスも将棋に似ていて、しかも世界大会もあるらしいということを知って、ちょっと始めてみた、というのが最初のきっかけですかね。大学一年の時に世界ジュニア選手権に出ることができて、その時に皆のレベルが自分が知っているチェスと全然違うのに驚いて、もっと強くなりたいと思ったんです。

山崎：ジュニアの世界大会に出るまでには、日本国内のいろんな予選を勝ち抜かなければなりませんよね。

渡辺：そうですね。一応予選みたいなのがあったんですけども、当時の日本のジュニアのチェスはそもそもやる人が少なく、まだそれほどレベルが高くなかったのと、将棋の知識がかなり応用ができてしまう部分もあって、あまり強くはなかったし自己流の極みだったけれども、代表になってしまったという感じですかね。

山崎：そこまでは誰かに特別に教わることもなかったんですか。

渡辺：全然なかったですね。自分で本を読んだりしました。なので、非常にいびつな……いや、今でもいびつですね、私のチェスは。弱点だらけであまり褒められたもんでないですけども。

山崎：いやいや（笑）……

渡辺：ただ、メキシコに留学する機会をいただいて、その頃までにはもう少し強くなっていたわけなんですけども、メキシコに留学して、そこではじめて先生について。キューバの人だったんですけども、キューバは社会主義国なので、ロシアとけっこう交流があって。ロシアのチェスの影響があるので非常にレベルが高いんです。

その当時はソ連崩壊からそれほど時間が経っていませんでしたということもあってお金がなかったので、メキ

シコに出稼ぎみたいな形で来ている人が何人もいて。そういう人たちの一人にレッスンを受けていた、という感じなんですね。はじめてそうやって教わって、あ、こういうふうにチェスってやるんだと。それまでの自分はいかにレベルが低かったか、いかに分からないでやっていたのかを痛感しました。

そして、ちょうど同じ年にモスクワでチェス・オリンピックという大会があって、はじめて参加したんですけども、その時にロシア人のコーチの人に、いろんな戦略的な考え方を教わったのが大きかったと思います。

山崎：ロシア人に教わるときは、英語で教わるんですか。

渡辺：そうですね。英語でした。ロシア語は分からなかったの。英語で教わって、とにかく今までは全然そんなこと思わなかったようないろんなアイディアに触れる、というのですかね。そういう経験を通してだんだん視野が広がってというか、ですね。

山崎：そのアメリカ留学とメキシコ留学で、メキシコ留学のほうが先だったんですか。

渡辺：はい、そうです。メキシコのほうが全然早くてですね。メキシコには学部四年生を終えたあとと、大学院の博士三年ぐらいの時にそれぞれ行って、アメリカに行ったのはその二年後かな、たまたまチャンスをいただいて、ということになりました。

山崎：いろんな国の人たちとチェスをやってらっしゃるわけですけど、その国民性というか、チェスの棋風とか、そういったレベルで何かこの手はロシア人だとか、そういう違いをお感じになったことってあります？ それとも、チェスは国民性には全然関係ない普遍言語と捉えられるのでしょうか。

渡辺：そうですね。今、中国はすごくレベルが高くて、国別対抗戦とかでも優勝候補になります。ロシア人のグランドマスターで中国のチェスはちょっと違うなというふうに言っている人がいますが、私自身ははっきり言って、あんまり分かりません。また、別のロシアのグランドマスターの記譜の解説の中で、「ロシアのチェスとは何か、を説明するのは難しいけれど、この手は確かに典型的なロシアンチェスの手だ」と書いてあったのを読んだこともありますから、国によって、というか少なくともロシアや中国ぐらいになるとそういう意識があるのは確かですけどね。

あとは、小さな国で言うと、アルメニアとかアゼルバイジャンなど、めちゃめちゃ強い国がいくつかあります。みんなで集まって、トレーニングをしたりして

いるのかなと思うのですが、非常に強いというのは分かるんですけど、どういうふうなスタイルというのと難しいですね。

語学とチェスの相関関係？

山崎：チェスってわりと数学と結びつけて考えられるっていうか、チェスをやると数学の成績も上がるということを昔何かの小説で読んだことがあります。もし、語学学習とチェスの相関関係があれば、お聞きしたいなと思ってたんですけども。

渡辺：はっきりしたことは言えませんが、実際、数学の専門家である数学の博士号をもってる人がチェスのグランドマスターでもあるという人は何人かいますね。あとはチェスのグランドマスターでチェスをやめて、別のキャリアで有名になった人と言うと、IMFでも働いていたケネス・ロゴフというエコノミスト（ハーバード大学教授）がいます。

チェスばかりやっても、チェスのコミュニティにしか貢献が出来ないと思ってエコノミストになったけど、エコノミストもそんなに読者がいるわけじゃないんだよねっていうようなことを冗談で言っていたりしていました。（注：記事化にあたって原典を探しましたが、見つけられませんでした。記憶違いかもしれません。なお、彼の経済学の本は日本語にも何冊か訳されています。）

他にもチェスをやめてビジネスマンになって、大成功している人が何人もいますね、IT系でも、ファイナンス系でも。一時期世界のトップ10で活躍していたフランスのロチェという選手が、現在ロシアでコンサルタントとして活躍していたり。そういう人たちのことを考えると、数学とチェスの関係は確かにあるのになって気がします、経済学も含めて。

語学教育に関しては分からないですけども、とにかく地道に勉強するしかないというところが共通してるんじゃないですかね。チェスってすごく地味なところもあって、駒がもう本当に数個しか残ってない局面でも、ちゃんとやらないと負けちゃうし。そういうところはある程度指せるようになるためには、すごくたくさん勉強が必要なわけですね。実際、自分は結局最後までそういう弱点を克服できなかったと思ってんですけど…。そういうところもちょっと語学の勉強と似てるところがあるのかなんていう気がしています。

また、今はともかく以前は、チェスの本を読んだりコーチを受けるためにロシア語を勉強する、という人は、ロチェさんや、有名なボビー・フィッシャーという人も含めてけっこういました。

あとはそうですね。いろんな状況に応じて、例えば、あんまり別にそんなに自分は好きな表現ではないけど、

最近だと四技能なんて事をよく言いますが、密接に関係しながらも、いろんな技能が必要っていうのも似てるかなと。ちょっとこじつけっばいですけど、そんな風に思います。

山崎：なるほど、たしかにエンドゲーム（終盤）は地味な感じがしますよね。ポーンがどうやって最後の枠にたどり着いてクイーンになるかというその駆け引きって、計算も難しいし、僕のような初心者になると、勝負がその段階にまで行き着くと考えるのも面倒くさくなっちゃうという感じは本当にありますね。

渡辺：そういう終盤の局面の考え方と、それまでの序盤、中盤の考え方はだいぶ違うのでそのところ、うまく切り替えられるっていうのも大事なのかなあと思います。例えば、終盤に出てくる特徴的な状況に Zugzwang（ツークツヴァンク）という局面があります。手番を持っている方が不利になる、という意味なのですが、そういうば、これってドイツ語ですよね？チェスとは関係なく、単語として見るとどんな意味になるのでしょうか。

山崎：Zugはもともとは「引っばる」「進む」などを意味する動詞ziehenの名詞形ですが、将棋やチェスなどで一手指すことを意味します。一方、「強いる」「～せざるをえなくする」を意味する動詞zwingenの名詞形ですから、Zugzwangとは、本当は指したくない、できればそのまま一手パスしたいのに、順番がまわってきて、指さざるを得ない、不利になると分かっているのに一步先に進まざるを得ない状況を意味することになるのでしょうか。

渡辺：そのとおりです。ご教示ありがとうございます。序盤・中盤ではほとんど出てこない考え方です。もちろん終盤戦でも速度争いになることもあります。 「パスできたら引き分けなのに」という Zugzwang の考え方はおもしろいと思います。

山崎：なるほど、いろんな局面に合わせ、柔軟な思考を駆使してゆかなければならない、まさに究極の頭脳ゲームですね。ただ一方で、チェスは大会にオリンピックっていう名前がついてもいるぐらいだから、スポーツという側面もあるんでしょうね。思考力に加えて、体力と集中力も要求されるし、コンディションを整えることも大事になる。

渡辺：集中力はすごく必要だと思います。あとは、特に年齢が進むとそうなのかもしれないですけど、頭の切り替えが大事ですよね。チェスのときはチェスを考えるように。チェスのことを考えるときの頭の使い方

は特殊だと思います。私がチェスをやめた理由の一つは、まさにこの、頭が切りかわらない、というところに関係しています。大会がはじまって数試合は、チェス・モードに切りかわらずに負け、終盤にはそこそこ調子が出てくるのですが、大会が終わると今度は日常モードに切りかわらず、チェスのことを考えてしまうのです。もちろん若い頃は、それなりに切り替えができていたのだと思いますが。

あと体力も本当に大事で、私はそんなにやらなかったんですが、例えば、試合が終わったあとにジョギングをしたりとかですね。スイスに亡命したロシアのグランドマスターでコルチノイという人がいるんですけども、夏は走って、冬はクロスカントリースキーで体力作りをして七〇歳近くまで世界のトップクラスに君臨したっていう、本当に化け物みたいな人もいました。

とにかく盤のまえに四時間から下手したら七時間とか、座ってなきゃいけないんで、座って集中力を保たなきゃいけないんで、そういう意味では本当に体力が必要なゲームだなというふうに思います。

山崎：世界大会レベルだと、トレーナーというのかコーチというのか、そういう特別な人がついてたりするという話を聞いたことがあるんですけども。

渡辺：もちろん、本当に一人でというのはもう今の世界ではあり得ないんじゃないですかね。例えば今の世界チャンピオンで言うと、まずは専属のトレーナーがいます。そのニールセンという人自身も世界のトップ100ぐらいのレベルなんだけど、それ以上にトレーナーとしてすごく優秀で、それ以外に序盤を専門に検討する人とか、フレッシュな感性を持った若い人をスパーリングパートナーとして呼んだりとか、世界チャンピオン・レベルになると、十人近く、あるいはそれ以上になるんじゃないですかね。そのチームのメンバーの人たちももちろんその多くが一流のチェスプレイヤーだったりするので、けっこうなチーム戦なんだろうな、というふうに思います。

山崎：渡辺先生にはご自分の経験のなかでトレーナーが付いたりとか、チームを持ったりという時期もあったんですか。

渡辺：ないですね。ただ日本代表として大会に出るときはなるべく……本当は代表メンバー同士でもっと前から練習とか重ねられるといいんですけど、なかなかそうはいかなくて、結局直前に話をして、大会期間中はとにかくお互いアドバイスし合うみたいな感じではあります。そういうところでは確かにチームとしてやったかなという感じがするんですが、それ以外では全然……。

遠隔でチェスの国際試合に出場

山崎：8月に世界大会に久々に日本代表として出場されましたよね。

渡辺：はい。あの時はたまたまナショナル・チェス・ソサエティーの今の会長さんに「選手がちゃんと集まるといいですね」というメールを送ったんですね。そしたら、「渡辺さん出ませんか？」という話になって。自分から手をあげたわけではないです。私はずっとブランクがあったのに加えて、オンラインでチェスをやったことはなかったの、さすがに勘を取り戻さなきゃというのと、オンラインの練習をしなきゃというので、昔のチェス仲間で、今関西のほうで生物学のポスドクをやっている松尾朋彦さんという方に練習試合をお願いしたり、チームメイトでとくに仲の良かった、星野かれんさんというブラジル在住の方と早朝トレーニングをしたりして（注：時差はちょうど12時間。星野さんにはILAのプロモーション動画でもお世話になりました。）、一応準備をしました。

山崎：そういうふうに遠くの人と練習試合ができるというのはオンラインならではのですね。

渡辺：通信チェスのプラットフォームってのは実はいくつもあって、色々な国の強い人たちが一回いくらでレッスンをしてくれたりというのもあります。何というか、世界全体が一つのチェスクラブみたいになっているというような革命的な状況ですね……そういう意味で本当に画期的な発明だと思います。

最近では大会も対面でできなくなってしまったので、ここ一年で、ものすごい数の、世界のトップが集まったオンラインのトーナメントが開催されています。世界チャンピオンのカールセンがほぼ毎回そういうのに出てきてですね、最初は彼が自分でスポンサーになって、自分で賞金を出して一位賞金をかささっていた、なんというのがありました。

チェスって、たとえば自分より全然弱い相手とやっても、ちょっとしたミスで負ける可能性はあります。だから今までの世界チャンピオンってそんなにたくさん大会には出てこなかったんですね。やっぱり選ばれた大会のなかでトップクラス同士でしかやらなかったけども、カールセンという人は……ある意味負けをというか、交通事故を恐れない、というんですかね。そういう感じでいろんな人と試合をやって、本当にすごい人だと思います。

ZOOMの効能 — オンラインを使った授業の工夫

山崎：オンラインの話が出たところで、語学の話に

戻しましょう。Zoomを使った授業のなかで感じたメリットとかデメリットとか、あと今後こういうふうに語学の授業を、せっかくなのでピンチをチャンスに変える形で展開したらいいんじゃないか、というお考えがあれば、お聞きしたいなと……

渡辺：オンライン授業に関しては、今年の東工大のスペイン語で二つ、自分で言うのもなんですけど特筆すべきことがあると思っています。一つは同じ時間帯の授業を合併して、複数教員で毎回授業をしています。教員それぞれの持ち味を上手く組み合わせることによって、例えばこんな角度からの説明も聞けるし、こんな説明もできるし、会話練習なんかも先生同士でやっているのを聞いてもらって、また練習してもらいたいなやり方で、なかなかうまくいってるんじゃないかと手ごたえを感じています。

特に、東大を退職された文化人類学の先生で木村秀雄先生という方と、東大の大学院で言語学を専攻している佐々木充文先生という方、その二人が文法の面ではすごく牽引してくださっています。私自身も一応ベテラン教員なので、ある程度こういう風に文法の説明をするという自分の型をもっているわけですけども、でもとても勉強になるんです。

その二人が例えばラテン語にルーツを辿って、こういうところは、ラテン語でもともとなっていたから、今のスペイン語でこうなってるんだという話になったり、いろんな言語における品詞の役割とかをかなり細かく説明してくださっています。しかも佐々木さんという方は別にスペイン語専門じゃなくて、ナワトル語というメキシコの先住民言語が専門なんですけど、それにもかかわらず、スペイン語はもちろんのことラテン語も詳しく、非常に語学に堪能な方で、本当に来てくれてよかったと思います。

もちろん、そういう先生だけだと話がむずかしくなりすぎる面がありますから、もう少し普通の説明をする先生がいることでバランスもとれるし（注：ベテランの杉守慶太先生がわかりやすい説明で人気でした）、全員のノウハウを合わせながら、より進んだ知識に進んでいくというようなやり方で、全部が理解できない学生でも話半分に聞いてくれればいいというふうに柔軟に対応しながら……そういう形がすごくいいなと思っています。

山崎：いいとこどりの合同授業（笑）。

渡辺：そうですね。たとえば永田夕紀子先生という若い先生がチャットでわれわれの説明を書き込んでいてくれるとかですね。そんな感じで非常に役割分担がうまくいってくれました。

山崎：学生にとっても、いろいろな先生がいて、いろいろな角度から教えてくださるということで刺激になると思うんですけど、それと並んで我々教員同士にとってもすごくためになるような気がしますね。我々って、ほかの先生がどういう授業をしてるかって、ふだんは全然見えない状態でやっているわけじゃないですか。でも、授業を見せ合うことで、お互いの刺激になるし、特に若手のまだ教えた経験が少ない先生にとってはとても参考になるんじゃないかと思います。

渡辺：今年のスペイン語は年齢のバランスもよかったですね。私のほかにベテランの先生が二人、若い先生が二人。我々が若い先生から教わることもありますし。たとえば木村先生は「佐々木さんのおかげで、モヤモヤしていたことがよくわかった」って仰っていて、そういう意味でも教員同士も本当に勉強になるというのはその通りだと思います。

オンラインで工夫したのはもう1つ、中級上級の授業です。大学院生が中心ですが、私は一通り文法のいろんな項目をダイジェストの形で教えていって、第3クォーターの途中ぐらいから、何か読んでみましょうというので、最初は歌の歌詞を取り上げて、今はガルシア＝マルケスの短編を読んでいます。ガルシア＝マルケスの文章はやはりなかなか難しいんですけども、学生たちに議論しながら訳してってもらうんです。

私はいないフリをしながら、皆さんの議論を横で一応聞いてはいるわけですね。それでちょっと別の方向に行っちゃうかなという時だけ「ここはこうじゃないかな」というふうにチャットで流すんです。声で入ってしまうと割り込む感じになりますが、チャットだと勝手に見てくれて、「先生がこんなこと言ってるよ」みたいな感じで話を進めていってくれるんで、あれはオンラインならではのですね。

もちろん学生の皆さんが優秀で、私が口を出さなくても、ちゃんとバリバリ進めてってくれるからこそできることだし、あとはクラスのサイズが小さくてディスカッションしやすいということももちろんありますけども。

東大でも非常勤講師として教えてるんですけども、東大では秋から隔週で対面授業とオンライン授業を組み合わせるという方式なんです。オンラインの回に文法を集中してやり、対面授業の週は一私は家がないので自宅から遠隔で配信しているんですけども一せっかく皆で集まるんだから、なるべく学生の皆さんのあいだの交流が進むような授業にしたいと思って、前の週に教えた文法事項を含む内容の歌を聴いて、歌詞をグループワークで調べてもらうということをやりました。

グループワークじゃなくて単に喋ってるだけのグループもあるみたいですけど、という学生さんの批判の声も

あったりはしたんですけども、学生さんたちの大半は好意的で、対面・オンラインという多様なフォーマットに合わせてどういう風に授業しようか、と常に意識しながらやっています。

山崎：もう僕も20年以上東工大で教えているので、以前なら教科書があれば、それに則ってある程度ルーティーンですませても大丈夫だったのが、遠隔でZoomでやらなければいけないとなると、仕込みも大変です。でも、いろいろと考えることで新しい発想が出てくるということは確かにありますよね。

東工大生向けのスペイン語教科書を作りたい！

渡辺：スペイン語初級の授業に関しては、今のところは、読解中心の教科書と、自習用に問題がたくさんついた文法中心の教科書の二冊に配布プリントを組み合わせ使っていますが、いずれは東工大生向けの教科書を作れたらと思っているんです。

山崎：それって、東工大生向けに特化した教科書というコンセプトになるのでしょうか。

渡辺：はい、もちろん東工大での使用を念頭におきつつ、ほかの大学でも使ってもらえるものにしようと思っています。今一番工夫として考えているのは、文法を教える順番をガラッと変えることですね。で、現在形のあとに接続法を教えるというのがいいのかなと思って。

山崎：それはすごい発想だ！

渡辺：なぜかという、まず一つは、プラクティカルな理由としては、スペイン語の場合は接続法の活用するのはすごく簡単なんですね。現在形とそっくりなんです。

ですので、過去形をいきなりやるよりは、そのほうが、ハードルが低いだろうと。要するに覚えやすさを重視するわけですが、それに加えて、接続法を先にやっちゃうと、「法」というものがあるというのを早いうちに意識させることになります。(注：スペイン語には、直説法・命令法・接続法という三つの「法」があり、英語の仮定法にあたる接続法も、日常的に英語よりずっと多く使われる。また、過去形も点過去と線過去の二種類がある。この二つはごく単純にいうと、「した」と「していた」にあたる。)

山崎：なるほど。

渡辺：スペイン語の文法ってのは、動詞の変化がいっぱいあって、動詞の法であったり、時制であったりっていうのは大事なんだっていうことを最初に提示して

しまう。そういうふうになれば、スペイン語の場合とはにか一つ動詞に百個近くの活用形があって、その変化をいちいち覚えなければいけないわけですが、全体像を理解したうえで取り組めば、学生もこの動詞の変化が重要で覚えなければいけないと納得してくれるんじゃないか。そういう教科書を作ろうと五年ぐらい前から計画してるんですよ。

山崎：ドイツ語でそんな教科書出てきたら、ぶっ飛ぶとか、えっ？と感じると僕自身思うんだけど、スペイン語でもそれに類した、そういう順番で教える教科書とか教育法って、これまではなかったということなんですか。

渡辺：私の知っているかぎりではないです。ただその話を教科書会社の人にしたら、上智の先生でそういう話をされていた方がいらっしまったという話をしたんで、もしかしたら上智では、そういう教育法でやっていらっしまるのかもしれない。

現在の研究・これからの研究

ー コロナ禍の制約を乗り越えて…

山崎：ご研究のほうはどうですか？ これまではメキシコを中心に海外でのフィールドワークを多くなさっていたと思うんですけど、今はコロナ禍の世界で、それができない状況ですよ。そのなかで、どんな形で今研究を進めておられるのか、それから今後どうやって研究を展開するのか、ということでは何かお考えになっていることってありますか。

渡辺：研究は進んでいないというのが一番正直な答えですけども、それでも今年度は三本、短めの論文が出る予定です。そのうちの一本はスペイン語教育についての報告で、こちらは『ポリフォニア』に載せられればと思っています。

もう一本は、スペイン語で書かれた日本の歴史の本の書評で、こちらはたまたま依頼を受けて書いたものです。こういう形で、必ずしも自分の研究の主な関心領域の外にあるものでも、頑張っって仕事をしていけば、自分の専門とどこかで結び付くこともあるかもしれない。そんなことを期待しつつ、やっていこうかなとも思っています。

それから三本目はメキシコ移民の歴史をテーマにした論文で、こちらは実は、以前一度投稿してリジェクトされた原稿を大幅に加筆したものです。実はとても残念な話ですが、コロナで亡くなった移民の友人がいて、その方についての話を、これまでの付き合いのことに加えて、オンラインで調べてわかったことを書きました。

そんなふうには、今までの知識を土台にしながら、オンラインを徹底的に利用するというやり方も今後の研究方法のヒントになるのでしょうか。たとえばFacebookでいろんな人の様子を見たり、Skypeなり、Zoomなりでインタビューをしてみるとか、いろんな可能性があると思うんです。

山崎：コロナ禍で亡くなられたご友人というのは若い方ですか。

渡辺：四十代まだ前半で、本当はご遺族にでもお話し聞くべきかもしれないですけども、ちょっと私も心の準備ができていなくて、いろいろとネットに上がってくる情報で……。彼はけっこうコミュニティーリーダーとして有名人だったので、そういう追悼記事なんかもいくつか出てですね。それを総合するに、メキシコの田舎のほうなので、病院の体制なんかも非常に脆弱で……。亡くなる間際まで治療らしき治療も受けられず亡くなってしまったということなんですね。

山崎：そういうのを伝えていくのも、今の世界ではとても貴重なことだなと感じますね。

渡辺：本当にそう思います。彼はコミュニティ活動では有名だったけど、仕事や収入という面では恵まれなくて、地元の町では仕事がないというので、バスで五時間ほどのところにある、そこよりはずっと経済的に潤っているリゾート地に働きに行ったりしてたんですね。

どこでコロナに感染したのかは分かりませんが、とにかく、いろいろと苦労された方だったので、現地調査はしばらく無理かもしれないけど、例えば彼の活動については、今後もネット経由でいろんな話を仕入れたり、もう少しきちんとしたかたちでご遺族の方に話を聞いたり、あとは今までの現地に行った自分の経験も生かして、さらに詳しい話を紹介していければいいなと考えています。

山崎：インタビューだとZoomやSkypeや、いろいろと便利なものができてますが、ただそれって両方がその環境を持っていることが前提になるので、たとえば経済的に苦しくてその環境が整えられないという方もいると思うので……。こっちが当たり前だと思っていることが実は当たり前ではないという感じを抱く機会も多いのではないかと想像するんですけど。

渡辺：確かに通信の環境なんかは脆弱だと思います。ただ、皆さんよく工面されていると思うのですが、ほとんどの方がスマホはお持ちなんですね。Facebookなども皆さんやっていて、写真をのせたり。でするのでできる形で連絡をとり合っていけたら

と思います。

東工大の第二外国語教育 — 多文化・多言語をめざして

渡辺：最後に私から一つ、スペイン語は新参者なので、東工大のこれまでの第二外国語の活動や理念について、山崎先生にぜひお聞きしたいと思います。着任前に第二外国語のホームページを拝見したら、いきなり「第二外国語は楽しい！」と出てきて、すごくいいな、そのとおりだよなあと、東工大で教えに来るのがますます楽しみになりました。

山崎：僕が東工大に来たのは1993年の秋だから、もう25年以上前になりますが、当時、第二外国語はドイツ語とフランス語とロシア語の三か国語しかなかったんですね。ロシア語は馬場宏先生という方が——江川卓というペンネームでドストエフスキーなんかを翻訳している有名な先生ですけど——教育に力を入れてらして、僕が赴任したのはすでに退官したあとで、お会いしたことはないんですが、今の執行部や前の執行部をはじめ、年輩の世代の先生に話を聞きますと、ロシア語を履修して馬場先生に教わったという方がたくさんいます。

ですからロシア語教育の伝統が根づいていて、当時の比率としては理系大学ということもあってドイツ語履修者が圧倒的に多く、その次にフランス語。ロシア語はほかの大学だと履修者は僅かだったと思うんですけど、ロシア語をとる学生も一定数いるという感じで、その三か国語でやってきました。

1996年に組織が大きく変わって、それまで外国語教員は工学部に所属していたのが、新たに作った外国語研究教育センターに全員が移ることになりました。その頃からですかね、ほかの大学では第二外国語に中国語はあるのに、うちの大学にはないということで、学内でも中国語を入れてほしいという声があがるようになりました。学生からもそういう希望が出るし、社会学の有名な橋爪大三郎先生が中国語の自主講座を開いたりもしていたんです。それで、最後は当時の学長からの意見だったと思いますが、ある語学専任のポストが空いたときに、そこを中国語で埋めることになって、その結果、劉先生が赴任されたんです。

以来、第二外国語は四か国語の選択必修でやってきましたが、ただ単位数はこの25年で徐々に減ってきています。特に2000年代初頭から、英語は実用英語教育を拡充・強化せよという学内のプレッシャーもあり、結局第二外国語の6単位のうち2単位分が英語との選択に変わりました。

さらに2016年から始まった今回のカリキュラム改革でどうになってしまうのかという不安もありましたが、当時の執行部、特に今年の春先に亡くなった教育担当

理事・副学長の丸山俊夫先生が、教養教育や語学教育に対する見識のとても高い方で、第二外国語のためにも奔走・奮闘してくださった。その結果、必修の4単位が残ったというのが今の状況です。と同時に、こちらは我々自身で考えた工夫ですが、同じ新カリキュラム始動のタイミングで、4単位のうち2単位は第三の外国語も受講できるようなかたちにして、そこにイタリア語、韓国語とスペイン語も加えました。

そんな流れの中で、中国語導入を決めた二十数年前的ような外からの意見ではなく、第二外国語メンバーの自主的な判断でスペイン語を第二外国語に入れることになったのは、とても望ましく喜ばしいことだったと思います。これで第二外国語が打ち出す多文化・多言語という理念はさらに豊かに肉付けされることになります。今後もニーズ次第ですが、第二外国語、さらには第三外国語を増やしてゆく方向はありうるでしょうね。

渡辺：ありがとうございます。東工大における語学教育の長い歴史のなかで、スペイン語が加わることで、新たな一ページが開ける——そのことをとても光栄に感じるとともに、責任の重さも痛感します。他の語学の先生方にいろいろとご教示頂きつつ、しっかり連携しながら、多言語多文化の理念を掲げて、精進してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



〈付録〉 自著紹介 (渡辺 暁)

残念ながら研究の方での単著はないので、チェスについて書いた本をご紹介します。2冊は入門書、もう1冊は日本で数少ない（幸運にも日の目を見た）中級向けの本です。

最初の本（『ここから始めるチェス』ナツメ社刊）を出したのは2010年でしたが、この時は編集者の方、そして出版社サイドと何度もやりとりをし、チェスを記述する日本語をつくる、くらいの気持ちでやりました。（私の主張が通ったところも、そうでないところもあります。ちなみに担当して下さった編集者の方は、現在はビジネス書の分野でヒットを連発されているようです。）例題に自分のゲームを使ったりして、見えないところでこだわっています。また、参考文献リストもきちんとつけました。おかげさまでかなり増刷されていて、私が今後学術書やスペイン語の教科書を書くことになっても、部数ではこれを超えるものは出てこないでしょう。



2冊目の入門書は、朝日新聞出版さんから出させていただきました。こちらは2冊目ということで、最初の本の差異化に悩んだのですが、前作において編集サイドとの最大の意見の相違点であった「終盤を先に教える」という点について、こちらの意見を尊重していただき、よりやさしいチェク

メイトの例題を盛り込むなどして、なんとか違うものにする事ができました。例題として、私が調査で通っている、メキシコ・ユカタン出身のグランドマスター、カルロス・トーレのゲームを使ったことと、最も古い序盤の作戦の一つで、最近リバイバルしている「イタリアン定跡」を取り上げているあたりが、オリジナルな点かと思えます。（イタリアン定跡の流行は2020年末現在も続いています。）



最後にご紹介するのが、『渡辺暁のチェス講義』です。これは大学院生時代に大分チェスクラブのホームページに定期的に書かせていただいていた講座をまとめ、大幅に加筆したものです（なお、ホームページ連載時のタイトルのOpen Your Eyesは、スペインのアメナーバルという監督さんの映画のタイトルをお借りしたものです）。

半分が終盤戦、残りの半分が中盤と序盤の考え方、という本です。内容面でももちろん多くの方にお世話になりましたが、出版に至る過程だけでも、大分チェスクラブの世話人だった小池秀幸さん、出版社を紹介して下さった小笠誠一さん、そして出版を引き受けて下さった安田喜根社長をはじめとする評言社の皆さん、実際の編集をして下さった青野徹さん、表紙をデザインして下さった栗田満さんと、たくさんの方のお手を煩わせてできた本です。こうして自分であらためて書いていて、出版というのは大変な作業だな、と思いますし、著者一人の努力でできるものではないのだな、と実感した次第です。



最後に学生の皆さんに申し上げたいのですが、本というのは高いと思われるかもしれませんが、一度本を書いたことのある人間の立場から言えば、ちゃんと読めばこれほど安いものはありません。見極めも必要ですから最初は図書館でも立ち読みでもいいですが、気に入った本があったらぜひ購入して、繰り返し読まれてみては、と思います。

ライティングセンター本格稼働

東京工業大学ライティングセンター創立

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

ライティングセンター・ディレクター 准教授 小泉 勇人

▼はじめに：東工大ライティングセンター開室

東京工業大学ライティングセンターは本年度第3クォーターより開室しました。本センターは8-9月にかけて本格的な開室準備に入り、チューターの募集と雇用、そして研修までを実施し、並行して受付システムの構築と試用期間を経て、10月の第2週からの開室となりました。大学で出される文章課題（学術的文章）を指導対象とし、文章指南（チュータリング/ピアレビュー）の訓練を受けたチューターが常駐し、文章を持参した書き手と対話を重ね、文章の改善を目指す教育機関です。

ライティングセンター所属のチューターは、文章執筆の原動力はあくまでも書き手自身の思考にあるという認識に立ち、まずは書き手の悩みを傾聴し、その思考を共に整理しようとしています。そして書き手が自発的な気づきに至るよう努めます。書き手はチューターとの対話を通じ、学術的文章の技術を確認しながら、文章の曖昧な箇所や修正案に自ら気付くことで大きな成長を遂げます。自らの気づきを通じて、書き手は目の前の文章課題のみならず、今後取り組むであろう文章課題に対しても、より自律的に成熟した文章を書けるようになるでしょう。その様な「自立した書き手」を育てることが、東工大ライティングセンターの教育機関としての責務です。

ライティングセンターは日本語・英語どちらの文章も受け付けています。「英語文章の添削（文法チェックなど）」は対象外ですが、そのための方法を紹介することは可能です。つまり、書き手が自分自身でどうやって文書を直すかに主眼を置いていまして、そのための支援であればセンターの支援範囲内です。

1回の相談時間は45分で、訪問する書き手を相手に、チューターは大学で課される文章課題の相談に乗ります。支援の時間をライティングセンターでは「セッション」と呼びます。受け付ける文章は、東工大で課される学術的な文章課題である限り、理系・文系を問わず全てを受け付けます。例えば、授業で課されるレポート、書評プレゼン課題、教養卒論、卒業論文、投稿論文、修士論文、博士論文に至るまで幅広く対応可能です。

また、文章のどの段階でも歓迎します。構想段階

（課題が課された直後など）、下書き、第一稿、推敲段階、提出直前の完成稿、既に提出済みであるが再度見直したい原稿まで、やはり幅広く受け付けています。持ち込む文章の量にも基本的に制限は無く、セッション時間および書き手の要望、またはチューター自身の判断によって扱う範囲を柔軟に決めていく方針をとっています。

ここからは、センター開室までの過程を報告するとともに、利用システムを詳しく案内し、そしてライティングセンターを支えるチュータリング技術を解説します。

▼6人のチューター達

ワーキンググループでこれだと思ふ方面に掛け合い、チューター候補生を募った結果、最終的に6人のチューター候補生が集いました。全員が研修を無事に終え、2020年10月から現役チューターとしてライティングセンターに務めています。「ライティングセンターを開設するには、そのための場所も大切だけれども、まずは人がいなければなりません」とかつて筆者に語ったのは、早稲田ライティングセンターでディレクターを務める佐渡島紗織教授でした。佐渡島教授は続けて、「文章について話を聞いてくれる人がいるのであれば、その瞬間に、どんな空間でもライティングセンターになります。例えば、講義に向かう前に上る階段の踊り場であっても」とも話されていました。

東工大でライティングセンターを創立するにあたり、チューターに相応しい学生を探すことは間違いなく重要な任務の一つでした。日本語と英語に対応できるライティングセンター設立を目指し、それぞれの言語からチューターを募りました。また日本語チューターに関しては、日本語文章に特化した人物と英語文章も見られる人物の両方を求めました。声を掛けたのは、筆者自身が指導するゼミ生やかつての受講生に留まらず、これまでの繋がりも頼ることにしました。特に、修学



支援センターの伊東先生、GSEPの阿部先生、Alvin先生にはチューター候補生の素養を備えた学生にお声がけいただき、紹介にご尽力いただきました。

▼コロナ禍におけるライティングセンター運営という挑戦

2020年においてライティングセンターを創立するということはそのまま、コロナ禍における運営という課題と不可分でした。東工大ライティングセンターの開室そのものが、遠隔セッションの展望を検証する貴重な機会となります。

Googleでwriting centerと打ち込んで画像検索すれば、一つのテーブルにチューターと書き手が隣り合って座っていたり、90度の角度で座って向き合いながらこやかにセッションを進めている様子が伺えます。これはまさに典型的なライティングセンターにおけるセッションの様子に違いなく、二人の人間が直接対面してこそこの運用であることが見て取れます。隣り合って座るのも、90度の角度で座ってテーブルを共有するのも、チューターと書き手がラポート（親密さ）を築くのに一役買っています。しかしコロナ禍においてそれは封じられていますし、また控えるべきことでしょう。

セッションには、教員も授業などを通じて使い慣れているZoomを採用し、チューター達には研修の段階からZoomセッションの動きに慣れてもらいました。幸い、Zoomにはセッションを可能にする機能が十分に搭載されています。文章の共有、チャットを通じての伝達が可能です。画面ONでのセッションも行えます。

表情が伝わるというのは一つの強みです。優れたチューターは書き手の表情や身振りから心理を推し量り、質問のタイミングや口調を調整できますが、それも書き手の様子が視覚的に把握できてこそです。もちろん、コロナ禍が収束すれば直接対面での本来のセッションが可能となり、それが様々な意味でベターであることは否定できません。しかしながら、相手の表情と声と文章が見えれば、ライティングセンターは稼働できる上に、チューターもまたその能力を存分に発揮できることでしょう。

▼予約受付システム

東工大ライティングセンターの情報は本学外国語セクションのホームページにて案内が提示されており、学生は同ページにて予約まで行うことができます。予約に際し、学生は日本語チューター・英語チューターのどちらを希望するのか、日本語チューターの場合、日本語の文章・英語の文章のどちらを希望するのかを選択できます。なお、英語チューターを選択した場合は、英語文章が自動的にその対象となります。

◆予約～セッション開始までのプロセス

- (1)以下の予約用カレンダーで、チューターのタイプ(JJ, EJ, EE)を選択。
- (2)カレンダーに表示されているセッション可能枠を選択。
- (3)所定の利用者情報を入力後、自分が指定したアドレスに予約完了メールが届くのを確認。
- (4)その後チューターよりセッション開始の15分前までにZoomURLがメールで提供される。
- (5)所定のセッション時間に合わせ、Zoomに入室する（本人確認のため学生証が必要です）

◆チューターのタイプ：予約する際には、次の中から希望チューターを選択して下さい。

JJ (Japanese paper discussed in Japanese language)：日本語を介して日本語文章を検討します。
 EJ (English paper discussed in Japanese language)：日本語を介して英語文章を検討します。
 EE (English paper discussed in English language)：英語を介して英語文章を検討します。

図1：書き手は自分が希望する対話言語と文章言語によって、JJ, EJ, EEの中からチューターを選択できる。

日時をクリックしてください
 2020/12/17(水)～12/23(水)

予約受付 開講 キャンセル待ち受付

	12/17(水)	12/18(木)	12/19(金)	12/20(土)	12/21(日)	12/22(月)	12/23(火)	12/23(水)
14:00								
14:20	Tutor D (JJ, EJ)							
14:40	Tutor B (EE)							
15:00	Tutor A (EE)							
15:10	Tutor C (EE)							
15:30	Tutor B (EE)							
16:00								
16:15	Tutor A (EE)	Tutor C (EE)						
16:30	Tutor B (EE)	Tutor C (EE)						
16:45	Tutor A (EE)	Tutor C (EE)						
17:00	Tutor B (EE)	Tutor C (EE)						

図2：ライティングセンター予約画面。書き手の希望に合わせてチューターを選択できる。

▼Zoom対応を踏まえた受付システムの構築

コロナ禍でのライティングセンター開室であることを踏まえ、Zoom情報が関わる受付システムをゼロから構築する必要がありました。予約メールの受付、チューターが予約者にZoomのURLを送信する動きなど、オンライン上でライティングセンターを開室するには細かなプロセスの構築が不可欠です。利用者とチューター双方に考慮したセキュリティ面での配慮も必要です。

東工大ライティングセンターでは、チューターが書き手に落ち着いて対応できるように、まずは利用者がZoom待機室に入室したのを確認し、入室の許可を出すようにしています。その後、学生証を見せてもらうなどの段階を踏まえることで、セキュリティ面での強化を行っています。その他、オンライン面で複雑化した手続きをマニュアル化することによって、チューター、ワーキンググループ教員、利用者間でスムーズな情報共有ができるよう工夫を凝らし、改善に向けてのモニタリングを続けています。

▼利用者情報の収集と研究

東工大ライティングセンターではセッション中に話題になった事柄、観察された文章の問題について、情報を集約し整理に努めています。医師が診察に際してカルテを作成するように、チューターは持参された文

章ごとに記録を取ります。

この記録を取るプロセスは、個々のセッションをスムーズに進行させるためにも欠かせません。例えば、利用者がセッション冒頭にて書き込む情報（文章の種類、分野、どのようなことに悩んでいるのか等）を通じ、チューターは利用者の文章の問題を確認し、これをベースに利用者との対話を開始します。このような記録メモは個人情報厳格に守った上で、かつ利用者の同意を得た上で集積されます。これらのデータは、やがてはライティングセンター内での研究やチューター訓練へと活用することが期待されます。これにより、学生が学術的文章を書く際にどのような点に悩んでいるかの傾向をセンター全体で推し量ることができます。

▼ワークショップの実施：ライティングセンターの研究機関としての側面

学術的文章を対象とする教育機関であるライティングセンターは、文章指導に関する学術活動を展開する場でもあります。外部講師を招聘しワークショップを開くのも、そういった活動の一環です。

10月には、センター設立後初めてのワークショップが、新任の木村准教授の主導により「書き手の自主性を尊重したコーパスツールの活用方法」と題して開催されました。ワークショップの詳細は木村准教授による報告をご覧ください。アカデミック・ライティング教育の研究も行うプラットフォームとしてのライティングセンターは、今後ますますの期待に応えていく必要があるでしょう。

▼更なる広報を：センター稼働率をどう高めるか

ライティングセンターの初動は予約者の少なさとの対峙となりました。それはディレクター側の広報力の乏しさに起因するものであり、反省する他ありません。一方、すぐには予約者でシフトが埋まらない中にも関わらず、チューター達は粘り強く自己研鑽に努め、予約者が入るまでに鋭気を養い続けていました。そして待望の第一予約者が入り、以降、同月内に4名の予約が入り、その次の月の中旬にはさらに6名の予約が入るようになりました。緩やかなカーブではあるものの、軌道に乗ることが期待されます。

引き続き書き手に利用してもらうためにも、広報の努力は常に求められます。例えばチューターの予定に合わせて組むシフト枠ですが、授業等の関係でこの時間に全く利用できない学生もいるでしょう。対応として、チューター人数の拡大、無理のない範囲での勤務時間設定の調整が必要です。

また潜在的な利用者になりうる学生は東工大に多くいるに違いありませんが、ライティングセンターの存在と効力が十分に伝わっていない可能性もあります。対応としては、宣伝のさらなる拡大が急務です。引き

続き、宣伝すべき範囲の拡充、および適度な反復を検討中です。

▼チューター研修で学び直すアカデミックライティングと、新たに学ぶチュータリング技法

チューター研修は Zoom を介したオンライン方式にて、1ヶ月ほどかけて行いました。研修の内容は、本校にて筆者がこれまでに担当した授業「教養卒論」や「ピアレビュー実践」、そして英作文授業でのアカデミックライティング/チュータリング指導の経験を全てミックスし、凝縮した形となりました。全4回に渡る研修にて、チューター候補生はアカデミックライティング技能を改めて確実な自身の技術とするため、パラグラフライティング、構成（序論、本論、結論）、引用の作法を順番に学び直し、習得しました。さらにもちろん、毎回の研修後半ではチュータリング技法の実施訓練も突破しています。チュータリングの訓練では、チューター候補生は自分が以前にどこかで書いた学術的文章を持参し、チューター役と書き手役を演じながら、模擬訓練を繰り返しました。チュータリング技法とはすなわちアカデミックライティング技能に沿ったクリティカルな質問を書き手に問うことであり、書き手に自身の文章の問題点に気づいてもらったり、また改善案を思案する手助けをする技術です。

ライティングセンターにおける文章チュータリングは、ただ対話を交わすのではなく、あくまでもアカデミックな観点から対話を繰り返すアクションにその最大の特徴があります。例えば、パラグラフライティングのルールでは、段落の最初にパラグラフ全体を統括するトピックセンテンスを書きますが、このトピックセンテンスをパラグラフ冒頭に書いていない文章があるとします。その時、チューターは「このパラグラフにはトピックセンテンスがありません。トピックセンテンスを書きましょう」とは決して書き手に言いません。チューターは、そのように直接的な指摘を「書き手に自分で考えさせる質問」に変えて伝えます。例えば、「このパラグラフを書くことで、あなたが最も伝えたかったこと（トピックセンテンス）はどのような事柄でしょうか？」とチューターは尋ねます。そう聞かれると、書き手はトピックセンテンスについて思いを巡らすでしょうし、それはどのようなものかを自分で考えるようになるでしょうし、またそれがパラグラフ冒頭に書かれていないことに気がつくかもしれません。

このように、「自立した書き手」を育てるというライティングセンターの理念を体現するチュータリング技法をこそ、チューター候補生には身につけてもらう必要がありました。

▼ライティングセンターの仕事：チュータリング技法 Q&A

ここからは、ライティングセンター最大の特徴であるチューター達の文章指導術—チュータリング技法—

について、より具体的に解説します。解説はQ&Aの形を取り、チュータリングについての素朴な疑問に筆者が応えるという形を取ります。これらの質問①は、本学にて筆者が数年に渡り担当してきた英作文クラスや「ピアレビュー実践」において学生から投げかけられた質問を元にしてあります。それに対する返答②も、そういった学生からの質問にこれまでに筆者が口頭もしくは文章にて解説してきた内容に基づいています。

チューターの仕事に興味のある学生にとっても、また現役チューターにとっても何らかの参考になれば幸いです。

①セッション中にチューターがメモを取るのは何故ですか？書き手がチューターの質問に応じて話をしている時に、特に一生懸命にメモを取っている印象があるのですが。

②ライティングセンターのセッションにおけるメモの効用は二つあります。まずは基本的なこととして、対話の流れを話題と共に記録することで、いつでも話の道筋を確認でき、すでに話題に出た事柄について再検討しやすくなります。セッションを続けていくと、話がそれていくこともよくありますし、当初共有した目標からずれていく場合もあります。そうした時に、メモにキーワードが書かれていれば話がそれる前の段階に立ち戻ることもできます。「そういえば... についてさっき話していましたよね？あれについてはどうですか？何か思うところはありますか？」というように書き手が最初に気になっていた話題に戻ることで文章改善のための話の道筋を整えることもできるでしょう。

もう一つの効用は、メモをしている動作を示すことでチューターと書き手の信頼関係を構築する足掛かりにできることです。「自分の話を聴きながらメモを取ってくれる人」＝「自分の話をちゃんと聞いてくれる人」という印象を書き手に持ってもらうことで、短時間であっても信頼関係を構築しやすくなります。例えば心理カウンセラーが来訪者の話を聞くときに必ずメモを取ることに、そのような意味もありそうです。

また大学生にとってのスタディスキルの一つとしてもノートテイキングは重要です。筆者も講義をする際によく学生の動作を見ているのですが、メモをとる学生の少なさに驚かされることがあります。もちろん、記憶力が大変に優れた学生であればメモは最小限で済むのかもしれませんが。あるいは、聴き取ったことをその場ですぐにメモに落とさず、いったんは自分の頭の中で咀嚼して情報の取捨選択を行なった上で後で一人で記録をまとめているのかもしれませんが。

しかしながら、もしそうではなく単にメモを取っていないだけなのであれば、それは大学生として基本的なスタディスキルが身に付いていない可能性があります。

ライティングセンターには授業の課題作文について相談に来る学生もいますが、その時にチューターが重視するのは、その授業がどのような方針のもと、どのような内容を展開し、それらがどのように課題につながっているのか、そして何より、そういった要素が書き手の頭の中で整理された上で課題に落とし込まれているのか、です。チューターが書き手に真っ先に尋ねるのはそれらの点です。書き手が授業中にメモを取っていない場合、果たしてそれらの質問に書き手は上手く答えることができるのでしょうか。そういった点について気づきを促すこともまたチュータリングの一環です。

授業内容について、担当教員の方針について質問をされたことで、書き手は「あ！自分は先生がどの様に課題をこなして欲しいのか、そのことを全く把握できていなかった！」と初めて気づけるかもしれません。そうすれば、その書き手の次回からの講義の受け方は全く異なるものとなりそうです。そういった気づきが書き手の頭の中でスパークしたのであれば、それはもう立派なチュータリング行為であると言えますね。

③「この自分の文章、どこか変なところありますか？」や「どう書き直すのが正解ですか？」という風にチューターにダイレクトに正答めいたことを尋ねる書き手もいます。書き手としてなら、私も自分の文章に不安があるので、そう聞きたくありません。そういった質問に対して、チューターはどのように対応するのでしょうか？

④書き手としては「この自分の文章、どこか変なところありますか？」や「どう書き直すのが正解ですか？」とついつい聞きたくなくなるものです。自然な態度です。しかし、自分でよく考えておらず、自分の文章なのに他人任せになってしまっている可能性もあります。だとすれば、チューターとしての対応は大きく分けて二つあります。

(a) そもそもの話ですが、優秀なチューターはこの類の質問を書き手にさせません。書き手がこの類の質問を出す前に、トピックについての簡潔な説明を求めて話をしてもらったり、気になっている箇所について音読してもらったり、チューターが疑問を持った部分について質問をして、書き手に自動的に「変な箇所」や「修正案」を気づかせるよう努めるからです。

しかし既にこの質問を出されてしまった場合は、例えばここから二つの動き(b)(c)に派生します。

(b) チューターの中で文章にどのような問題があるのか判断がついている場合は(それが本当に問題点なのかどうかは別の問題として)、変であるとか正解であるとかの言明は避けつつ、「ここがちょっと気になる

んですけど、どういう意図で書いたのですか？」と聞いてみます。そうして説明をもらう内に、書き手は自分でおかしな点に気づくかもしれません。

(c)チューターも文章のどこが／何が問題点が判断がついていない場合は、例えば、正直に「何か変なところがあるかどうか、実は私もまだよくわからないんですよ」と伝えます。チューターが自分の認識を正直に伝えることには、チュータリングの性質上特に大きな問題ではありません。その上で、書き手自身としては文章に何か違和感はないか、音読をしながら確かめるのはどうか、そもそも「正解」とはなんのこたなのか(学術文章的に問題があるということ?それとも主題の選択に自信がないということ?課題の規定に上手く添えているかどうかということ?)といった点について色々尋ねることが有効です。変かどうか、間違いがあるかどうかを判断する前に、書き手に尋ねる事柄はいくらでもあります。

チューター側の基本的なマインドとしては、「よく知らない人のよく知らない文章を短時間で見ているので、理解できなくて当たり前」という点を意識してみてください。文章内容について知ったふりをする必要は全くありませんし、むしろ「私より、書き手であるあなたの方がこの文章についてよく知っているのだから(少なくともあなたの頭から出てきたものなのだから)、ちょっと教えて欲しいのですが…」というくらいの姿勢がちょうど良い、と考えてみてはどうでしょうか。

◎ライティングセンターでは、チューターは書き手の文章について批判もしないし、直接的に問題点を指摘したり提案をしたりはしないと聞きました。そのようなやり方で本当に書き手の文章は改善されるのでしょうか?自分が書き手であれば、批判はともかく間違いの指摘や提案してもらえるとありがたいと思ってしまうのですが。

▲まず、「自分が書き手であれば」と書き手の心理を慮ることは大切な営みですね。ただ、書き手とチューターは、共に考えるという意味では対等であっても、役割は異なります。確かに、批判はともかく指摘は積極的に受けたいと希望する書き手もいるでしょうし、チューターも内心は指摘や修正を積極的に行いたいと考えるかもしれません。

しかしながら、それでも異なるアプローチを探ろう(そしてそちらの方が有効な場合もありはしないか)という可能性についても考えてみましょう。ライティングセンターが重要視するのは、書き手の思考をどこまで尊重し、書き手から話を引き出し、文章に足りていない部分を自律的に気づかせられるかどうか、です。チューターが積極的に指摘や提案をしてしまうと、それがあたかも書き手の意見よりも上にあるもので、書き手はそれに倣

わなければならないような空気が出来上がってしまいます。チューターが自分の意見を出せば出すほど、それだけ書き手が自律的に考える余地が失われる可能性もあります。チューターはアカデミックライティングに通暁している必要はありますが、「正しい書き方の専門家」や校正者ではありません。

また、指摘や提案を受けたいという状態は、書き手としてはやや受け身の状態に近づいているのかもしれませんが。自分の文章に責任を持ち、積極的に思考していくのが学問の本態ではないでしょうか。もちろん、そういった思考が促されるようチューターは最善の道を書き手と共に探ります。

◎書き手が持参する文章の内容について、チューターにその分野の知識がないと上手くセッションができないのではないのでしょうか。例えば、人文社会学を専攻しているチューターが理系の文章を持参する書き手に対応したり、逆に理系分野を専門とするチューターが文系の文章を持参する書き手に対応することは可能なのでしょうか。

▲特定分野に関するチューターの知識がチュータリングの巧拙には影響しない、というのがライティングセンターの立場です。これは Writing Across the Curriculum という発想に基づいています。では、なぜチューターに特定分野の専門知識がなくてもその分野の文章について相談を受けることができるのでしょうか。一つの理由を挙げるなら、アカデミックライティングのルールは分野に関わらず意識されるものだからです。例えば、分野を問わずパラグラフの意識、序論・本論・結論の構成、引用の作法(剽窃をしない)については議論を待たず共通して重要な要素です。ライティングセンターはアカデミックライティングを踏まえて書かれる大学課題を対象としていますので、チューターが書き手との間で話題にする事柄は主にこれら学術的文章技術を巡るものとなるでしょう。

ちなみに、むしろ気をつけるべきなのはチューターの専門分野と書き手の専門分野が重なる場合です。チューターは往々にして書き手より年代的に先輩の立場になりますが、専門分野が重なった場合、「この研究分野を学んでいる先輩として助言したい」という欲望に抗するのは極めて困難です。結果的に、その分野について教え込んでしまう、間違いを直接的に指摘してしまう、安易に提案をしてしまう、下手をすれば批判めいた言動にまで踏み込んでしまう恐れさえあります。筆者は出自が16世紀イギリス文学(シェイクスピア演劇)の専門家ですが、大学院生時代にライティングセンターに勤めていた際に最も警戒していたのは文学関連の文章を書き手が持参してきた場合です。というのも苦々しい体験があり、シェイクスピア劇につい

で論じる課題を持ってきた書き手を相手に、筆者は45分間のセッションで大いに話が盛り上がりはしたものの、具体的な文章改善自体にはほとんど踏み込めていなかったのです。専門のゼミでは問題ないのかもしれないかもしれませんが、ライティングセンターにおけるアカデミックライティング技術の検討という見地からは問題です。

ということで、チューターの皆さんは、筆者と同じ轍は踏まないようにしましょう。

◎大学では学術的文章を書くと思うが、特に人文系の授業などで課される文章課題ではしばしばエッセー調(随筆調)で書いてくる書き手もいます。学術的文章を意識して書くべきだと伝えた方が良いでしょうか？

▲チュータリングの理念においては「...べき」といった考え方や指摘は控えるのが基本です。ただし、人文系の課題であっても、学術的文章として書くのは基本ではないのでしょうか。それでも書き手がエッセー調の文章を書いている場合、何か意図があるのかもしれませんが。まずは書き手に確認するのが先決です(もちろん、「エッセーのように書くんじゃないよ、学術的文章で書かなくちゃダメだよ」といった批判めいた指摘は控えます)。その上で、可能性を探ると次の3点に大別されるのかもしれませんが。

- (1)その授業課題でも学術的な文章で書くよう求められているが、書き手がそのことを意識できていないか、学術的文章についての知識がない。
- (2)その授業が求める文章の種類幅が広い(e.g.教員が「エッセー風で書いても構わないよ」と伝えている)。
- (3)書き手の側でなんらかの意図があり、「あえて」学術的文章の書き方にしがたがない。

いずれの場合にせよ、チュータリングとしての対処は書き手に尋ねることが第一です。書き手が(1)(2)(3)のどれに該当するのは、授業の情報、課題の内容、教員の希望、書き手自身の課題への理解、書き手自身の希望などに耳を傾けることで明らかになっていきます。

◎書き手の中には、文章を書くことがとても苦手であったり、また気の乗らない文章課題をしなければならず結果的にモチベーションが下がってしまっている方もいます。その様な書き手が来て、こちらの質問に対しても曖昧な返答しか返ってこなかったり、「よく分からないです」といった返答だったり、ただ沈黙するだけだった場合、チューターはどうすれば良いでしょうか。

▲これは全てのチュータリングに言えることですが、このケースの場合は特に、「褒める」ことを意識しましょう。「褒める」と言うとき少し大雑把な表現になってしまうのですが、その書き手の文章や説明の中にある

良いところを拾って、それが評価に値することを伝えましょう。どのようなセッションでも、チューターは一回と言わず折に触れて肯定的な言葉を伝えてしかるべきではないでしょうか。しかし、なぜこのようなアクションが必要なのでしょうか。

まず第一の効用は、書き手に自信をつけてもらって、モチベーションを上げてもらえるかもしれないという点です。そもそも、自分が書いた文章をよく知らない他人に読んでもらうという行為にはそれなりの緊張が伴います。誰でもそうです。ひょっとしたら笑われてしまうかもしれない、批判されてしまうかもしれない、無関心な態度をされてしまうかもしれません。書き手はライティングセンターに来た時点ですでにある種の不安を抱えています。

そうした状況の中、書き手の文章を褒めることは、自分が書いた文章を他人に見せる行為から来る、ある種の恐怖心を克服してもらうためには必要なアクションです。そうしてまずは書き手に安心してもらう、チューターへの信頼感を持ってもらうことで、書き手の自信は緩やかに保たれ、対話が進むのではないのでしょうか。安心して、チューターを信頼し、その信頼するチューターから色々な質問をもらうのですから、書き手は徐々に文章を書いていく行為に対して前向きな気持ちを持てるようになるかもしれません。

第二の効用として、褒めるコメントは、次のクリティカルな質問へとつながる布石となります。チューターとの対話に安心と信頼が生まれれば、次にチューターから問われる疑問についても書き手は余裕を持って対応できるのではないのでしょうか。次に挙げるのは、具体的なチューターのコメントの例です。「肯定的な評価を伝える→書き手に喋ってもらう質問を出す」プロセスを確認しましょう：

(例)「うんうん、なるほど、この文は、伝えたいことが明確に書かれていて、読みやすいですね。とってもいいと思う。やっぱりここは、自分なりに力を入れて意識して書くようにしたのでしょうか?・・・ふむふむ、なるほど確かにそういったことを意識していたんですね。じゃあ、今説明してくれたこの文章についての補足的な事柄ですが、それはしっかり書けていると思いますか?どの辺りにそういったことを書いているか教えてもらえませんか?」

(例)「このパラグラフでは、冒頭にしっかりと明確なトピックセンテンスを置かれていますね!素晴らしい、有効です。では、そのあとに続く文ですけれど、このパラグラフ冒頭のトピックセンテンスを十分に解説している文になっていますでしょうか?大丈夫かもしれないけれど、よかったらこのパラグラフについて、トピックセンテンスとその後に続く説明がどういう風

につながっているのか、試しに説明してみてくださいませんか?」

(例)「この文は、伝えたいことが明確に書かれていて、読みやすいですね。この分野に明るくない私にも十分に伝わる文だと思いますよ。ここは結構意識して工夫したところなんじゃないですか?じゃあ、他の文も同じように明確で丁寧に書かれているか確認しません?文章の他の箇所、自信がある文はありますか?それはどこでしょう?・・・あなるほど、この文も確かにしっかり書いていますね。じゃあ反対に、ここの文についてはどう思いますか?ここも同じように丁寧な書き方をしていると言えますか?あるいは、『実はそこまで自信がない文なんだけど』、という箇所はあったりするのでしょうか?」

(例)「うん、なるほど、君は自分でもこの文章は全体的によく書けていると思っているのですね。私も、その通りだと思います。じゃあ、あえて、あえてですけど、ものすごく厳しい先生がこの文章を読むとして、そうしたら、『強いというならここは目ざとく指摘されるんじゃないか?』って箇所はありますか?」

以上に挙げた例から、チューターが「肯定的な評価を伝える→書き手に喋ってもらう質問を出す」プロセスが見てとれましたでしょうか。書き手の自分で考える力に敬意を表しつつクリティカルな質問を出していることがわかります。

もちろん、チューターの目から見て明らかに問題のある文であるにもかかわらず、無理に褒める必要はありません。あくまでも、チューター側から見て「確かにこれは評価できる。なぜなら～」とそれなりに評価の根拠もセット伝えられる部分に限って、思いっきり褒めれば、それはとても有効なチュータリングとなるでしょう。

▼あとがきに代えて

本稿では、本学ライティングセンター開室のプロセスを報告し、その利用システムを紹介しつつ、最後にQAの形も取ることでライティングセンターの理念およびそれを支えるチュータリング技法について解説しました。令和2年度に創立され、後期にていよいよ開室した東工大ライティングセンターは、筆者が本学に勤めて以来の悲願でした。本来であれば遥かに早い段階で設立に着手するべきであったかもしれませんが、筆者自身の腰の重さゆえにここまでの年月がかかってしまいました。幸いなことに、筆者が本学に勤めてからの数年間は、「教養卒論」「ピアレビュー実践」並びに、所属する外国語セクションの英語クラスにて日本語/英語アカデミックライティング教育の機会を何度もい

ただき、またそれらの経験を通じて東工大生のアカデミックライティング力を測り、東工大生にフィットするライティングセンターとは何かを深く思索する時間に恵まれました。辛抱強く見守っていただいた外国語セクション教員の先生方、またリベラルアーツ研究教育院の先生方に深く感謝を申し上げます。ライティングセンターのワーキンググループにて細やかなサポートを続けてくださっている石原先生と田村先生にも御礼申し上げます。

受付システムの構築もまた様々な人の力によって成り立っています。現在も各チューターの勤務管理から連絡まで御尽力いただいています外国語事務の和田さんに感謝申し上げます。また、ライティングセンター専用ページが外国語セクションウェブサイトにて上手く機能しているのは、外国語セクションホームページ委員会の先生方による検討と承認、設定を請け負ってくださっている有限会社アルケミーの矢田さん、その仲立ちを細やかに進めていただいた外国語事務の廣瀬さんに多くを負っています。そして、新任で大変にお忙しい中、ワーキンググループにて御活躍くださり、機械に弱い筆者に代わり予約システムの整備とサイトへの埋め込みを実行に移してくださった木村大輔准教授のお働き無くしては、ライティングセンターの予約システム構築は不可能だったでしょう。

広報については、修学支援センターの伊東幸子先生にもご支援いただきました。伊東先生にはセンター設立前よりアカデミックライティング/チュータリングワークショップ開催の機会を提供くださり、またさまざまな面よりサポートをいただきました。野崎雅子先生のご協力もいただき、修学支援センターのLINE通知にてライティングセンターの宣伝をすることができました。特に英語文章を英語で相談したいと思われる学生に向けては、GSEP御所属の Alvin Christopher Galang Varguez先生には他系への働きかけをしていただきました。改めまして、多くの先生方の協力があってこそ東工大ライティングセンターの利用者が増えてきていることがわかります。

そして最後に、ひたむきに研修を受け、その要求を見事突破し、現役のチューターとして活躍を続けている6人の東工大生(学部・大学院)に感謝を捧げます。チューターの皆さん一人一人の丁寧な仕事が、東工大ライティングセンターの、ひいては本学のアカデミックライティング教育の向上に寄与しています。ありがとうございます。

この文章を読んでいる読者の皆さんの中で、文章を書く課題に取り組んでいるのであれば、ぜひ東工大ライティングセンターを訪れてください。チューター一同、御来場をお待ちしております。

コーパスワークショップについて

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 木村 大輔

2020年10月30日、ライティングセンターではSGUを活用したコロナ時代の国際化取組経費を活用し、「書き手の自主性を尊重したコーパスツールの活用方法」と題したワークショップを、都留文科大学のNicholas Delgrego先生を講師としてお招きして実施しました。Delgrego先生は、ライティングセンターに関する研究をご専門とされており、Writing Centers Association of Japanの運営委員も務められています。コーパスとは、実際の言語使用例のデータベースとその分析を指し、学習者自身が文章例の検索や分野ごとの文章様式の差異について調べることに役立ちます。広義には、Googleなどの検索エンジンもコーパスに含まれます。コーパスの活用は学習者に自走的・継続的な学習態度と方法を身に付けさせるというライティングセンターの理念に合致しています。学習者がコーパスの活用方法を身につけることで、アカデミックライティングを主体的に考えるため機会が生まれ、ライティングに関する規範的な知識・技能を補完する役割が期待されます。

大学院生や教職員を対象として行われた本ワークショップへは、リベラルアーツ研究教育院の内外から21名の申し込みを受け、当日は16名の参加がありました。小規模のイベントではありましたが、Delgrego先生の明るいお人柄もあり、活発に意見交換がなされました。ワークショップは、ライティングセンターを訪れる学生が抱える問題の共有から始まり、それらの解決を手助けするための手段としてのコーパスツールの可能性と具体的な活用方法についての説明もあり、終始チューターの立場に立った内容でした。

コーパスの説明は、汎用的なツール（e.g. Google, Google Scholar）から、より専門的なツール（e.g. Corpus of Contemporary American English [COCA], AntConc）まで網羅されており、それぞれの長所と短所についても丁寧な説明がありました。例えば、Google検索の活用に関しては、“quick and easy”であることや検索時の小技が使えること（e.g. 引用符を用いて文字列をロックできること）が長所として挙げられ、検索結果が膨大で玉石混交である点が短所であると指摘されました。また、AntConc（使用者自身が言語データをインプットしてコーパスを自作するためのツール）の解説では、特定の分野の論文を用いてコーパスを作成することで、専門用語の用法について

理解を深めることができる反面、時間がかかりすぎるため締め切りまでの時間などの外的要因によって使用が制限されることが指摘されました。コーパスツールの有用度と活用法は、書き手の英語レベルと専門知識量によって左右されます。そのため、複数のツールとそれぞれの長所・短所の説明は、どの参加者にとっても有益であったと思われます。講演後には、質疑応答と歓談の機会もあり、終始和やかなムードで会を終えることができました。

最後になりましたが、本ワークショップの広報・実施において、外国語事務室の皆様、特に和田様に多大なるご尽力を賜りました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

18th English Speech Contest Report

Foreign Languages Section, Institute for Liberal Arts

Associate Professor Kumiko Kiuchi

On 22 July 2020, the English department hosted its 18th English speech contest 'Expect the Unexpected'. This annual event is tied to the two elective courses, English Speech Seminars 9/10 and 13/14, which run in the first and second quarter semesters. Due to the corona pandemic, the speech contest was held online on zoom for the first time and welcomed over 260 students and faculty members in the audience. Students who signed up for the courses spent two months, also online, learning skills pertaining to composing and delivering speeches, redrafting their speech several times based on the peer-critique sessions, and brushing up their delivery skills for the event. It was unfortunate that only 8 out of 20 students in the courses (2 student did not attend the courses in 2Q) were able to present their speech in the contest due to the limited time frame. Prior to the event, we had a preliminary speech contest in the class and selected the speakers by votes. The 10 students worked very hard to support the contest: MCs, presenters of the opening and closing remarks, time keeper, a team of editors compiling the programme of the event, a team of liaison officers sending invitations to key faculty members and accompanying the judges.

In the speech contest, the 8 finalists appeared confidently on the zoom screen, some of whom with the selected background to match the topic of the speech. The topics were wide-ranging: knowledge sharing in academia, renewable energy, organic food, universal basic income, an invitation to rethink common sense, gender equality and shark conservation. With the lead of the two excellent MCs, a very lively Q and A session followed each speech. At the end of all the speeches, the audience voted for one speech of their choice. After deliberation among the judges, the winners of the four awards were announced: Audience Choice, Best Composition, Best Delivery and Faculty Award. The contest closed with a warm round of applause for the contestants.

The Audience Choice Award denotes the audience favourite, the best speech chosen by the audience. Shiho Otomo won the award for her speech "Does Eating Organic Food Make Us Healthier?" The speech challenged our assumption that organic food is healthier. Drawing on some scientific research, she provides strong evidence and convincingly argues that organic foods are not necessarily more nutritious nor safer than non-organic foods. With her confident and communicative presence added to the thought-provoking content, the speech also received the Faculty Award, offered to the best speech chosen by the faculty.

Erdenebat Battseren's speech "Is Renewable Energy the Future?" received the Best Composition Award, which is given to the speech with most effective structure and evidence of thorough research. His speech successfully demonstrated the potential of solar energy by providing the striking research result that "174 quadrillion watts of energy continuously strikes the earth's surface, which is about 10000 times the current demand". It also clarifies very succinctly the two goals of renewable energy, affordability and accessibility, while illustrating the challenges to coordinate the global shift to the renewable energy.

The speech "Are We Equal?" by Chan Yu Nin was the winner of the Best Delivery. Nin's powerful and assuring presence on the screen communicated her passion about the topic and her effective hand gestures and convivial body language came out very naturally. While she clarifies how women receive unequal treatment in society, she also draws our attention to the fact that men are also the victims of the expectation of 'manliness'. The speech invites the audience to embrace the diversity of gender and to make small changes around them: "Many a little makes a mickle."

Gratitude of the organising committee of the English Speech Contest, aka the instructors of the English Speech Seminar, goes to the audience for their active participation in the event, the faculty members for their cooperation, the administrative staff and teaching assistants of the Foreign Language Section for their unchanging assistance, and the three judges for their encouraging and engaging questions and comments. Finally, the instructors would like to thank and praise all the students of the English Speech Seminar for their hard work and active participation in the course despite such difficult circumstances under the COVID-19. You made this event truly successful!

Speakers

1. Natprawee Pattayawij – ‘Capitalism Barrier in the Way of Science’
2. Erdenebat Battseren – ‘Is Renewable Energy the Future?’
3. Shiho Otomo – ‘Does Eating Organic Food Make Us Healthier?’
4. Zhanybek Bekbolat – ‘Universal Basic Income: Essential or Detrimental?’
5. Huu Binh Minh Tran – ‘Is It True That 1+1 = 2?’
6. Yu Nin Chan – ‘Are We Equal?’
7. Huu Nhat Huy Tran – ‘How can the world prepare themselves for a future pandemic?’
8. Yilun Lu – ‘Shark, the Misconceived Creature’

Production Team

MCs: Tien Dung Do, Wuttichai Chaiyarit
 Opening remark: Nipun Mangkaja
 Closing remark: Eriko Kishimoto
 Timekeeper: Anuul Altan-Ochir
 Liaison Officers : Puchiss Panitpotjaman, Akiyoshi Okubo, Zhiyang Yu
 Editors : Chawala Inchid, Nattha Buraraksakiet, Auksarapak Kietkajornrit, Thanakrit Yoongsomporn
 Instructors : Mariko Anno, Kumiko Kiuchi

Shiho Otomo

Does Eating Organic Food Make Us Healthier?



What is the biggest influence when you choose which food to eat? Cost, taste, or quality? Among many answers, one of the most influential factors are health benefits (i). Because more people are concerned about health benefits and food safety, organic foods are becoming more and more popular. It is widely believed that organic foods are healthier than eating conventionally grown foods. Some of us probably even think “organic” automatically means “healthy” or “safe”. But is that so? I’m here to tell you today a surprising fact: studies don’t suggest so. Today, we will look at the differences between organic and conventionally grown foods to find out if organic foods really make us healthy or not.

First, let me briefly explain what organic foods are. Organic foods are produced without the use of fertilizers, pesticides, and additives. In Japan, there are requirements by the Japan Agricultural Standards Law for foods to be labeled as “organic”. For example, “organic processed food” must have no more than 5% of its weight of additives (ii). On the other hand, conventionally grown foods are the opposite of organic foods and use fertilizers and pesticides.

Now, let us look at the nutritional quality of organic foods. There are few studies that found organic foods to have slightly lower nitrate (iii). Does this mean they are better than conventionally grown foods? The answer: no. According to a report by Professor Magkos (2003) of the University of Copenhagen, it is still unknown whether nitrate is beneficial or not to human health (iv). Another expert, Christine M. Williams (2002) also implies that “it is unlikely that small differences in nutrient content would have health implications for consumers”(iii). On top of this, an article by Harvard Medical School (2015) says that organic foods have no nutritional advantage over conventionally grown foods (v). What this means is that the nutritional quality of organic foods and conventionally grown foods are the same.

But you might think: organic foods certainly don’t use pesticides; doesn’t that mean it is safe and healthy? To answer this question, let me introduce an interesting study by Gonzalez (2003) (iv). He found that a number of organochlorine pesticide residues were present in soil and vegetables cultivated in line with organic standards. What this means is that though the amount of pesticides is small, organic foods still do contain pesticides. In

addition to this, Moore (2000) also underscores that “residue levels of permitted pesticides in both organic and conventional food are often below allowable limits”(iv). There are also predictions of residue levels declining in conventionally grown foods due to stricter regulations.

To conclude, organic foods are no healthier nor safer than conventionally grown foods. So the next time you head to a grocery store, don't waste your time and ask yourself “should I choose organic or conventional?” Because, to our health, there just aren't any differences.

- (i) The Factors That Influence Our Food Choices. (n.d.). Retrieved May 23, 2020, from <https://www.eufic.org/en/healthy-living/article/the-determinants-of-food-choice>
- (ii) Organic JAS. (n.d.). Retrieved May 23, 2020, from https://www.maff.go.jp/e/policies/standard/specific/organic_JAS.html
- (iii) Williams, C. M. (2007, February 28). Nutritional quality of organic food: shades of grey or shades of green?: Proceedings of the Nutrition Society. Retrieved May 18, 2020, from <https://www.cambridge.org/core/journals/proceedings-of-the-nutrition-society/article/nutritional-quality-of-organic-food-shades-of-grey-orshades-of-green/FFE1784B44530E4F9C828A265C776ABB>
- (iv) Magkos, F. (n.d.). Organic Food: Buying More Safety or Just Peace of Mind? A Critical Review of the Literature. Retrieved May 19, 2020, from <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/10408690490911846>
- (v) Harvard Health Publishing. (n.d.). Should you go organic? Retrieved May 18, 2020, from <https://www.health.harvard.edu/staying-healthy/should-you-goorganic>

Erdenebat Battseren

Is Renewable Energy the Future?

Climate change, global warming, air pollution, water pollution... Significant changes in global environments, as well as shifts in the social climate, have generated interdisciplinary problems throughout the globe. Today I am going to discuss one of the excruciating issues, the world's massive fossil fuel dependency, and its alternatives. Is it possible to switch to fully renewable energy production? Can we achieve the goal of SDG 7 by 2030? Can we provide sustainable and clean energy for all? What are the challenges?



Globally, we consume over 11 billion tons of oil from fossil fuels every year. Consumption of fossil fuel is increasing exponentially. Therefore, if we carry on as we are, estimates by “Ecotricity” show that we will run out of gas and oil in 50 years (i). Furthermore, this massive fossil fuel dependency pollutes the earth. A 2017 study by “Our World in Data”, confirms that since 1900, global CO₂ emissions increased from 2 billion tons to 36 billion (ii). To support the carbon-free industries around the world, 195 countries joined the Paris Agreement in 2015 (iii). Today, the declination of CO₂ emission is an absolute necessity for human beings and I can see a promising solution in using renewable energy.

Unlike fossil fuels, we have an abundance of renewable resources. For example, from the sun, 174 quadrillion watts of energy continuously strikes the earth's surface (iv), which is about 10000 times the current demand. However, to use renewable energy, we face two major challenges: affordability and accessibility. Since renewable resources are dependent on weather and there are limits based on availability and location. Also, during transportation, 8% of energy is lost because of electric resistance. This is one of the main reasons why renewable energy provided only 24 percent of our needs in 2018 (v).

Luckily, we are approaching the turning point. Researchers are assuming that with the support of policymakers, and other organizations, we can fully switch to renewables in 30 years. Advanced technologies like smart grid and utility-scale storage batteries are being developed, which can help us to capture, store, and provide energy more

efficiently. Through international collaboration, we can tackle the challenge of transportation by setting up wise policies. Also, a recent report from asset management company “Lazard” showed that the cost of producing one megawatt-hour of electricity by solar power is now half the price of coal and the trend will keep getting cheaper (vi).

The transition to all-renewable energies may be a complex issue involving economics, technology, and politics, but we should consider the benefits of it. For example, switching to renewables, according to WHO, we could prevent 4 to 7 million deaths from air pollution (vii), while first slowing and then reversing the outcomes of global warming and stabilizing the global energy sector. Top scientists around the world are making breakthroughs all the time which can tackle the challenges we are facing. And many governments and organizations are investing in technologies that harness the renewable energy all around us. I strongly believe that through collaboration, the world can speed its transition to sustainable energy and achieve the goal of SDG 7 by 2030.

- i. Ecotricity. “The End of Fossil Fuels.” Ecotricity, 2016, www.ecotricity.co.uk/our-green-energy/energy-independence/the-end-of-fossil-fuels.
- ii. Ritchie, Hannah, and Max Roser. “CO₂ and Greenhouse Gas Emissions.” Our World in Data, 11 May 2017, ourworldindata.org/co2-and-other-greenhouse-gas-emissions.
- iii. Climate Change, United Nations. “The Paris Agreement.” UNFCCC, 22 Apr. 2016, unfccc.int/process-and-meetings/the-paris-agreement/the-paris-agreement.
- iv. Toronto, Solar Power. “How Much Power Does the Sun Give Us?” How Much Power Does the Sun Give Us? | Solar Powered in Toronto, 2012, www.yourturn.ca/solar/solar-power/how-much-power-does-the-sun-give-us/.
- v. Ritchie, Hannah, and Max Roser. “Energy.” Our World in Data, 28 Mar. 2014, ourworldindata.org/energy.
- vi. Waxler, K. (n.d.). Levelized Cost of Energy 2017. Retrieved June 29, 2020, from <https://www.lazard.com/perspective/levelized-cost-of-energy-2017/>
- vii. World Health Organization. “9 Out of 10 People Worldwide Breathe Polluted Air, but More Countries Are Taking Action.” World Health Organization, World Health Organization, 2 May 2018, www.who.int/news-room/detail/02-05-2018-9-out-of-10-people-worldwide-breathe-polluted-air-but-more-countries-are-taking-action.

Chan Yu Nin

Are We Equal?

Gender inequality in simple words refers to the unequal treatment or perceptions of individuals based on their gender. Although there has been progress over the last few decades, many challenges still remain to achieve equality. Today, I will focus on three main points, which are gender inequality in the workplace, impact of Covid-19 on women, and gender inequality affects everyone.

Women tend to receive lower pay and opportunities than men in the workplace even if they have a higher education. In Malaysia, women earn about 95% of what men earn on average and this gender wage gap is due to the incorrect perceptions about a woman’s ability to contribute. According to a study of Cornell University, mothers are perceived to be less committed and some of them might even face the “motherhood penalty.”

Next, I would like to talk about how Covid-19 has affected women. This year, the whole world has changed its operating way due to the Covid-19 pandemic. It has affected people from all walks of life in terms of physical health, mental health, and economy. According to the United Nations, women are hit harder by the economy impact of Covid-19 as 60 percent of them work in the informal economy, which means they are involved in economic activities, enterprises, and jobs that are not regulated or protected by the state. Due to this pandemic, they lost their



jobs. Along with this situation, domestic violence rate has also increased as many women are trapped at home with their abusers.

When we talk about gender issues, many people will first think of it as a women's issue. In fact, this gender inequality affects everyone. For example, common stereotypes the society has towards men like "Men should be strong" or "It is shameful for men to cry" makes men feel pressured to be physically and mentally strong. Other than that, community with old fashioned concept of gender makes transgenders being discriminated. Most of the time, the old fashion minded community is unwilling to accept the fact that people can have different gender identity from their sexual orientation. As a result, they are forced to hide their gender identity in fear of being mistreated and most likely to experience mental health problems

Some say that gender equality may never be achieved as we are often not aware of our own biases. However, I believe that all human beings have their own rights to develop their personalities and make choices without being limited by stereotypes and prejudices. Therefore, we should eliminate our irrational biases to achieve a peaceful and sustainable world. It will definitely be a long way to go, but as the saying goes, "many a little makes a mickle."

第二外国語としてのスペイン語の開講にあたって： 新任教員のごあいさつ

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 渡辺 暁

スペイン語新任教員の渡辺と申します。第3クォーターを終え、第4クォーターが始まろうとしている時点で、本稿を書いています。この記事とは別にドイツ語の山崎先生との対談というかたちで、自己紹介そしてスペイン語教育の抱負等は述べさせて頂きましたので、この「新任教員あいさつ」は、私が授業という場をどのような場・空間としてとらえているか、をテーマにしたいと思います。

オンライン授業では技術的に難しいのですが、私はよく授業で映像を使います。前任校の山梨大学のスペイン語の授業では、スペイン語圏の映画や旅行番組をよく見せていました。色々な映像を使ってきましたが、8年間いるうちに少しずつ、この学部では必ずこれを見せよう、という映画が決まっていきました。医学部では尊厳死を扱った「海を飛ぶ夢」、生命環境学部では写真家のセバスチャン・サルガドさんを追ったドキュメンタリー、そして教育学部では、「僕たちのムッシュ・ラザール」という学校を舞台にした映画です。(ちなみに「海を飛ぶ夢」以外はスペイン語圏の映画ではありません。)

最後の「ムッシュ・ラザール」は、カナダのモントリオールを舞台にしたフランス語の映画です。心に傷を負ったアルジェリアからの亡命者が、ある大きな問題を抱えたクラスの臨時担任として、身分を隠して採用されるのですが、その映画の最後の方に、その「問題」について、生徒たちが言い争うシーンがあります。そのとき、ラザール先生は動揺する子供たちにこう語りかけます。「クラスという場は、絶望をぶつけ合う場ではない。友情と勉強そして思いやりの場であり、それぞれの人生をささげ、分かち合う場だ。(要約)」

文脈を無視しての引用で恐縮ですが、私は教員としてこの言葉に強く共感します。学校にいと授業というのはあたりまえの存在ですが、その授業がなければ会うことさえなかったかもしれない人たちが、ある一定の期間のあいだ毎週集まって一緒に勉強し交流する、というのは、考えてみればそれだけですごくいいこと、だと私は思います。そうして生まれた授業は、「出会いと共生の場」であり、学生の皆さんと教員が交流しながら、お互いに何かを学んでいく場、だと思えます。興味関心にひかれてたまたま出会った人たちが、お互いに敬意を持って、知識や意見そしてアイデアを交換しあい、人間関係をつくっていくような、そんな場所になればと思っています。

もちろん、授業の内容を準備するのは教員です。ト



ピックを決め、自分が話すことあるいは学生の皆さんに話し合ってもらうこと、そして授業をどんなふうに進めていくかを考えます。しかしそれは、教員が一方的に授業の方針を決め、学生さんに押し付ける、ということの意味するわけではありません。ある程度の方針や到達目標を決めたとしても、学生さんの様子そして実際の授業の状況次第で、そうしたプランは変化していきます。

ましてや2020年度のように、新型コロナウイルスの影響によって状況が刻々と変化するような場合には、学生さんの意見を聞き、さまざまな事情を考慮して、計画を修正していくのが当然だと思います。事実スペイン語の私たちはZoomの特性を生かし、同じ時間帯の全ての授業を合同で行ってきました。複数の教員がそれぞれ違った視点から一つの文法項目を教える中で、教員どうし、お互いから多くを学んだことを、ここで強調しておきます。(なお、この2020年度のスペイン語初級の合同授業については、外国語学科の論文集『ポリフォニア』にレポートが掲載される予定です。ご関心を持って下さった方は、ぜひそちらも御覧下さい。) また、多くの学生さんがご意見を寄せて下さったおかげで、授業がより良いものになったと思っています。この場を借りて学生の皆さん、そしてご担当いただいた先生方にお礼申し上げます。

これからもスペイン語の教員そして授業の運営担当者として、クラスとはどんな場であるべきか、をよく考えながら、参加して下さるみなさんにとって心地よい空間を作っていきたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

自己紹介に代えて： 多言語コミュニケーションと専門英語教育

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 木村 大輔

こんにちは。2020年4月に着任いたしました木村大輔です。着任してからもうすぐ1年になりますが、これまで東工大では学部の英語科目と博士先端教養科目の担当、及びライティングセンター立ち上げ・運営の補助を行ってきました。専門は応用言語で、グローバル化社会における言語の役割の変化に興味を持っています。具体的には、「英語を軸とした多言語コミュニケーション」の分析研究を専門としており、研究内容を言語教育へ応用することを目指して日々活動しています。

国境を超えて知的・文化的交流が盛んに行われるグローバル化を背景に、言語を使う・教える・学ぶことの意味は大きく変容してきました。第二言語話者同士の英語を介した交流が常態化した現代社会においては、英語を軸とした多言語コミュニケーションという視座が肝要です。私はこれまで、タイでの2年間の滞在や米国での8年間の大学院生経験を通じ、英語オンリーの視点の限界を肌で感じてきました。多言語話者にとって英語は一つのリソースにすぎず、彼らのコミュニケーションは様々な言語や文化の影響を受けた特徴を示すからです。一般に英語学習者を指して使用される「ノンネイティブ」という言葉には「不完全さ」や「劣等性」などの否定的な意味合いが含まれますが、英語学習者を「多言語話者」とであると捉えることもできます。バックグラウンドの異なる多言語話者同士のやりとりを成立させるためには、既成の言語知識に囚われすぎず、相手と柔軟に協働し、経験から学び続ける姿勢を持つことが必要になります。このような視座で英語を捉えた場合、ネイティブとノンネイティブを区別して考えることは必ずしも生産的ではありません。グローバル化の文脈においては、万人が「英語使用者」とであるとともに「英語学習者」とであるといえるのです。

応用言語学者としての私の研究・教育は、上記のような考えに基づいています。研究活動においては、多様な言語・文化的背景を持つ者同士が実際にどのように多言語を使用し、相互理解を達成しているのかを調査・考察することに注力してきました。これまでに、タイやアメリカでの現地学生と留学生の交流や理系研究者のミーティング場面など、様々な種類の相互行為の分析研究に携わってきました。また、日本人学生の英語使用・学習態度についての調査もしています。研

究に加え、教育の場においてもネイティブとノンネイティブの区別や、あらかじめ決められた規範を疑う姿勢を涵養する努力を行ってきました。アメリカにいた際には、ネイティブ学生を対象とした世界の英語についての理解を促すための授業を担当したこともあります。



応用言語学的な視座は、東工大の様な理工系の大学でこそ有益であると私は感じています。現代の理工系の専門家にとって、日常的な英語の使用を避けて通ることが難しいのはもはや自明であり、英語で情報発信する能力は専門性の一部であるといえます。実際、学術の場においては多くの多言語英語話者が活躍しており、ジャーナルの編集者など高度な言語知識を必要とする役割を担っている者も決して少なくありません。日本の理工系学生は英語に苦手意識をもっていると言われるかもしれませんが、東工大生の多くは、英語使用者としての基盤を大学に入学した時点ですでに有していると思います。また、そもそも言語学習は教室の中だけで完結するものではありません。東工大生には是非英語を「学ぶ」ことだけでなく、「使う」ことにも目を向け、学内外の多様性を活用して学び続ける自走的な姿勢を身につけてほしいと願っています。私も授業だけでなく、様々な場面で学生のサポートができるように努めます。

英語という言葉には、英米文学、娯楽、異文化コミュニケーション、学術研究言語などの様々な側面があり、「なぜ英語に携わるのか」という問いは全ての学習者・指導者が向き合うべき課題です。今後も多言語話者として英語を使う・教える・学ぶ意味を追究し、研究と教育の相互的充実に励んでいきたいと思っています。まだまだ未熟者ですが、どうぞよろしくお願い致します。

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション

外国語だより Vol. 5

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 5

発行日 令和3年3月1日

発行所 〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション
TEL 03-5734-2287 FAX 03-5734-2938

発行者 上田 紀行

編集者 田村 斉敏・戦 暁梅

印刷所 鮮明堂印刷株式会社